

天皇の退位・新天皇の就任・元号について思うこと

宮川敏彦

このような問題について、いろいろと考えることは多いが、誰もが生肌において、直接に体験できることは珍しい。わたしもそうであるが一言、述べてみたい。私が昔から言ってきたことは、純法理的にどうなのかということではなく、もっと国民の生活や天皇の人間的なありようにおいて考えたい、そして、制度と立場のあり方について、常識的社会的に解釈するということだ。

一番わかりやすい河音の話をもとにしてみよう。新天皇が、就任に当たって、述べた「ことば」がある。「5月1日午前の『即位後朝見の儀』である。国民には慣れないものであるが、要するに重要な「天皇のごあいさつ」である。この日から、「新天皇としての本格的な活動を始めた」と5月1日新聞夕刊にはある。

みなさんお読みになったと思うが、夕刊より再録してみる。
「日本国憲法および皇室典範特例法の定めるところにより、ここに皇位を継承しました。
この身に負った重責を思うと肅然たる思いがします。顧みれば、上皇陛下にはご即位より、30年以上の長きにわたり、世界の平和と国民の幸せを願われ、いかなる時も国民と苦楽を共にされながら、その強い御心をご自身のお姿でお示しになりつつ、一つ一つのお務めに真摯に取り組んでこられました。上皇陛下がお示しになった象徴としてのお姿に心からの敬意と感謝を申し上げます。

ここに、皇位を継承するに当たり、上皇陛下のこれまでの歩みに深く思いを致し、また、歴代の天皇のなさりようを心にとどめ、自己の研鑽に励むとともに、常に国民を思い、国民に寄り添いながら、憲法にのっとり、日本国および日本国民統合の象徴としての責務を果たすことを誓い、国民の幸せと国の一層の発展、そして世界の平和を切に希望します。」(全文)

ここには、危殆や困難にめげず、世界平和を願い、象徴を貫いた父親への大きな謝意が込められている。私も同じように思う。安倍首相だったら、どのように表現するだろうか。天皇の「ことば」には大きな国際情勢もなければ日米軍事共同体もトランプ大統領ももちろんない。

上皇が天皇を退位するとき、国民とのおわかれのあいさつで「日本国民が忘れてはならない「4つの大きな出来事」を述べた。第一に8月6日の広島への原爆の投下、第二に8月9日の長崎市への原爆投下、第三に2011年の東日本の巨大地震と大津波被害、第四には8月15日の太平洋戦争終結、だった。他にもたくさんあったがこの4つを否定するものはいないだろう。天皇在位中の最大の歴史的成果は日本と世界の平和に対する果てしない希求と戦争に対する憎悪・反省であった。退位・就任の時、国民の多くが求め続けた願いは、「これからの日本」だった。だから天皇も「憲法に忠実に生き、私が何を大切に生きられるかが最も大切」と何度も繰り返してきたのであった。たくさんのおばあさんが涙を流したが、天皇の退位を「仕方ないけれど、もったいない」と思ったのではないのか。「ああ、天皇のような憲法理念を持つ総理大臣が日本にいたら」、絶望感からの解放で私の未来像も代わったに違いないと思う。

最後に「元号について」考える。安倍首相が「元号の意義」を説明した。菅官房長官の後だったので、「元号おじさんには悪いけれど」私の意見を言うと、安倍首相の話はこうだった。

「令」は古典では梅の花を指す。梅の花が、新しい季節を示す、やってくる。その花のように美しい時代が来るのだ。これが「平和」に繋がるのです。本当にそうかな？と思って、私は古びた旧版の広辞苑を開いた。

【令】 おおせ いひつけ 命令 長官 巧言…色 よいこと めでたいこと、など…、梅など有りもしない。私だったら大抵、「号令 徴兵令、命令などである。首相だからといって、国民にウソを言っているわけではない。他に、日本の高校生がよく利用する学習研究社(学研)の「漢字源」では広辞苑程度の要約版ではない。ついでに大学生によく読まれている岩波書店の『日本史辞典』には、令は見出しにもない。つまり、現代の日本語ではないのである、首相は「小学生でもわかる」といったが、嘘っぽすぎだ。

平和主義天皇は去ったが、新天皇に期待したいと思う。この人は文字も文化もよく知っている知識人だ。

次回は、英国に日本の天皇がよく行って学んだ英国の王室主義と日本の天皇について考えてみたいと思う。みなさんご意見をお願いします。

毒に吐られたこと

土居 修

1973年1月2日、5度目の防衛戦。相手はチャチャイ・チオノイ選手。強豪である。当時の新聞は、彼の苦戦を連日伝えていた。

初回、相手の右ロングフックを受けてダウン。このとき、彼は右足首を捻挫している。以降はラウンドの間に氷で冷やしつつ、足を引きずりながら打ち合いに耐えた。中盤に入る。彼は強気のボクシングで形勢を徐々に逆転。迎えた12回、1度目のダウンを奪う。相手はレフフェリーに促されるように立ち上がった。だが、彼の「狂気」にさらされた相手は2度、3度とダウンする。タイの英雄がマットに沈んだ瞬間であった。

極貧の家庭で育った。「プロボクシングで世界王者になり、両親のために家を建てよう」が幼いころからの口癖。中学校卒業後に帝拳ジムに入門するが、体格は貧弱でプロ

ボクサーには向いていないと揶揄された。しかし、1970年10月23日、世界初挑戦でタイトルを獲得。そして、5度目の防衛。そのサクセス・ストーリーはあまりにも過酷で、美しい。

しかし、美しいその人生はあつけない伝説となる。壮絶な戦いの日から23日後、受車シボレー・コルベットの運転中に、大型トラックと正面衝突。享年23歳。

現役王者のまま事故死したために「永遠のチャンプ」と称されている。だが、「永遠の」の証しは、ボクシング人生の真髄を見事に言い表した彼の「ことば」にある。

「弱い挑戦者を連れてきて、簡単にKOしてもファンは喜ばない。たとえ苦戦が続いたとしても、誰もが認める強い選手に勝たなくては、真のチャンピオンとは呼べない」。



ついでに6歳

西原みちを

大場政夫の潔さ、これが男の美学であろう。1949年生まれ。第25代WBA世界フライ王者。その人生は日本が高度成長期に向かう時代のアンチテーゼであったように思う。

還暦を過ぎた今、借眼を賣るが如きおれの人生への哀感ほ酒で紛らすしかない。「飲みすぎよ」。台所で妻が怒っている。

桜の花が散って華桜になると、新緑の山々を紅で飾るように、つじの開花が始まる。新聞紙上にも「〇〇公園のつじが満開」等の記事が目を引くようになる。つじの記事が、単に「つじ」とだけ書いてあれば、こちらも、ああ、もうそんな季節になったのかと時の流れを認識したまま見流して行くのだが、近頃、はつじの植垣を書くように

「現在、オンツツジとつじの名称を書かれると、さして、どなんつじだろうと、一瞬考えこんでしまう。「オンツツジ」の「オン」はどんな漢字を当ててるのだろうかと考えてしまう。土佐の小話にこんな話がある。

学校から帰った子供が父親に「今日学校で親のオンは山よりも高く、海よりも深いというて習ったけれど、親のオンたなに？」父親「おんしゃあ、そればあのことかわからんかや。親のオンはお父やう、メンはお母やあ。」

普通、「雄・雌」は、「オス・メス」という。「オン・メン」は土佐の方言かと思っただけ、そうでもないらしい。鶏の雌雄は「メンドリ・オンドリ」と言っ、「メスドリ・オスドリ」はあまり聞かない。「オンツツジ」の「オン」は、この「雄」の意味なのか、釈然としないまま時が立ったが、ある時、牧野博物館に行つた時、展示館で、下の階へ下がるスロープを下りて行く時、壁に、四半の花の写真が展示してあり、春の花として「満



写真左がオンツツジ(花の色は赤)、右がメンツツジ(花の色はピンク) (牧野博物館HPより) 白黒で印刷が不鮮明なため区別できないのが残念です。(ニュース担当 大川)